

フリーカメラマン 石川文洋さん



【いしかわ・ぶんよう】
1938年、沖縄県那覇市首里に生まれる。5歳から千葉県で生活。学生当時流行していたニュース映画のカメラマン助手になったことから報道人生が始まる。69年、朝日新聞社にスカウトされ84年まで報道カメラマンとして勤務。ベトナム戦争などの戦地に赴き、取材撮影をした。現在は諏訪市上諏訪に住み、フリーカメラマンとして活動中。

命どろぼう

ぬち どう たから(命より大切なものはない)

Q1、戦場で写真を撮っている時の気持ちはどのような気持ちですか？

A、トンキン湾事件によってベトナムがアメリカに初めて攻撃され、1965年に初めてベトナムに行き、4年間に戦場の写真を撮った。初めて戦争を体験した。その時、自分の目の前で住民が兵士に殺されたりして、怖かった。戦場の写真を撮っているのはすごく辛い。しかしこれが自分の仕事だから仕方なかった。

Q2、軍隊は、必要だと思いますか？

A、ベトナム戦争を撮っていて、兵士は戦争を悪いことだと思っ



飛び散った体

死体を手に持つアメリカ兵も家庭に戻れば、優しい夫であり、父親だろう。戦死した兵士も戦争が無ければ家族と共に暮らす農民である。殺す方も殺される方も戦争によって人間の尊厳が奪われた。

石川文洋著 「私が見た戦争」より
ベトナム戦争の写真

争を悪いことだと思っ
ていない。むしろ兵士
は、戦場の写真を撮る
と撮れ」と思っている。
沖縄戦を体験していな
かったが、ベトナム戦
争を見たとき、沖縄戦
もこのような感じだっ
たんだらうと思った。
ベトナム戦争と沖縄戦
争は似ている。戦争

は、兵士が殺し合い、
民間人が犠牲になる。
戦争は政治家が起こす
もの。そして戦争は全
てを破壊する。人の命
を大切にしなければこ
とは、日本の間違いで
ある。軍隊があるから
戦争になる。日本に軍
隊はいらない。話し合
いをすれば戦わなくて

もいいと思う。戦争は
国同士の理解から回避
できる。なにより、軍
隊は絶対には持ってい
けない。そのため、
話し合い、理解し合う
ことが大切。

Q3、沖縄の慰霊祭
に取材に行かれていま
すが、初めて行った慰
霊祭ではどのように感
じましたか？

A、人は死んでしま
ったら終わり。死んだ
人の命が奪われて、残
念だ。もしこの人達が

ものなんてない。沖縄
では、「命どろぼう」と
いう。この言葉の意味
を日本の若者にもっと
よく考えてほしい。ま
た、日本や世界中で起
きた戦争のことをもっ
とよく知ってほしい。
私は戦争の事実をでき
るだけ若い人達に伝え
ていきたい。

沖縄戦の語り部

親里千津子さん



【おやさと・ちづこ】
1931年11月、沖縄県島尻郡北大東島に生まれる。45年4月、沖縄本島の地上戦により南部へ追われる。64年4月、長野市へ転居。沖縄戦の語り部として長野県内を中心に各地で講演を行っている。「ちーちゃん

語り継ぐことが 使命

とても心配。

Q3、今の沖縄の基
地問題に対する政府の
対応をどう思いますか
？

A、全然生ぬるいと
思う。もっとしっかり
とした信念を持ってや
ってほしい。憲法に人
権を守ると書いてある
のだから沖縄の人の人
権を守ってほしい。

Q4、基地問題を含
め今の日本にどうして
ほしいですか？

A、戦争をする体制
を作っていないのでほ
しい。周りの国に武力
で勝とうとするのでほ
なく、話し合いで解決
してほしい。お互いの
ことを理解しあって、
友情をはぐくんできて
ほしいと思う。

Q5、親里さんが考
える平和とは、どうい
うことですか？

A、世界の国々が信
頼で結ばれること。自
国以外の国とも協力し
たりして助け合いなが
ら生きていけること。

Q6、今の中学生に
どんなことを考え、学
んでほしいですか？

A、日本で悲しい体
験があったことを忘れ
ないで。戦争の悲惨
さ、平和の大切さをし
っかり考えていってほ
しい。

Q7、最後に中学生
に伝えたいことは何で
すか？

A、ひとつは、いか
なる理由でも戦争は絶
対にしてはいけないこ
と。もうひとつは平和

地上戦を 語る

13歳の時に沖縄地上
戦を体験しました。日
本唯一の地上戦が沖縄
戦でした。
1944年、アメリ
カの空襲から沖縄戦が
始まりました。普段は
港が見えないのです
が、空襲や爆撃で樹木
などが跡形もなくな
り、戦争時は、水平線
が見えていました。

北部へ行けという命
令が出されましたが、
建物や倒壊してあり、
南部に逃げるしかあり
ませんでした。逃げて
いる途中、「水をく

れ」と叫んでいる人も
たくさんいました。自
分が逃げるのに必死
で、そんな人を見ても
何も出来ませんでした。
逃げていいるとまだ
残っている家がありま
した。一緒にいた人
達、そして母とそこ
にかくれました。

ある日、母が夕方に
なり、ろうそくを探し
にいくと、その日だけ
夕方に攻撃がありまし
た。母と、近所のおじ
いさん、おばさんのい
る家に爆弾が投下され
ました。見てみると、
おばさんが「ちーちゃ
ん、水をちょうだい」
と叫んでいました。し
かし母の生死だけが気
になり、そのまま家
に向かいました。

今になり、水をく
んであげれば良かった
と後悔していると言っ
ています。家に入ると、
母は足をなくして亡
くなっていました。し
かし、その光景を見ても
涙はでませんでした。
兵士がやっているよう
に母の髪を切って持
って逃げました。

戦後、姉に会って初
めて涙を流しました。
戦争は、人の心を無く
していくものです。も
う二度と戦争を起し
てはいけません。